

令和5年6月1日発行 春燈/第78巻第6号(毎月1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

春燈

2023 June

6月号



安住敦の句

水中花子が買ひ来しを咲かせけり

『午前午後』昭和四十七年

「六月十一日、鳥越神社祭礼とて」と前置がある。すでに梅雨に入つてのこと、敦師は身の回りのものを携えて入院。手術は無事に済み、程、週靜もすれば退院と分かる。五人部屋の病室に長男が恋人を伴なつて見舞いに現れた。縁日で買った水中花を持つている。若い二人と一緒に水中花に水を入れて咲かせた。日頃の家族仲の良さ、師の温かい人柄がしのばれる。

佐藤まさ子

梅雨茸や勤辞めては妻子飢う

『午前午後』昭和四十七年

還暦目前サラリーマンの敦師は、当時「俳句で食っていけるともいこうとも思わなかったが、嫌な勤めならやめてしまえばいい、ふみ切ればいいのだと思いつながらやはりその決断がつかなかった。」と記しておられます。

勤めが憂鬱で辞めたいが、辞めては妻子を食わせていけない。

心の葛藤を梅雨茸の陰湿なイメージとなぞらえられたのでしよう。

西本花音

名誉主宰 安立公彦

主宰 鈴木直充

天晴朗に三月の朝の道

蒼空に固さありけり初桜

早春や陸橋渡る独りの歩

真砂女忌や葎稜草の茹でこぼし

亀鳴くや鉄路の果ての夕明り

八重洲から丸の内まで地下おぼろ



窓に降る雨の白さや蜩汁

一書得て古書店街の日永かな

紅梅やとほきむかしの彩りに

行く春の道に小櫛の落ちてをり

当月集

鈴木直充選



○ 西村洋平

若鮎の光となりて堰越ゆる
啓蟄や河馬の小耳のよく動く
足裏に探る日向や春寒し
簡易雛ピンポン玉の顔笑ふ
半眼の蛙を土に戻しけり

○ 福田水明

大利根の風にうかるる奴風
納骨の穴ぼつかりと木の芽晴
雑巾をぎゆつと絞つて入彼岸
陽炎やバスの出払ふロータリー
告天子の声ふりしきる誕生日

○ 立竹人

どこ見てもうす雲かかる辛夷かな
ときをりの風さわぎをる桜かな
心得たりと舞ひきたる桜かな
満を持しひとかぜ受けて落花かな
桜散りしきて山峡くもりぐせ

○ 大槻祐二

ばばさまの唄の零るる雛祭
春時雨相手あつての口げんくわ
烏どちに指揮者ぬらし囁れり
歓声か嘆きか砂を吐く蜆
春泥に二の足を踏む餓鬼大将

○ 杉山乃ぶ子

小でまりや傘寿の兄の褒め上手
栄転とだけ書きしメモ薔薇芽吹く
お彼岸の日の明るさよ子の墓よ
雨の止む明日を待てずに花見かな
シエルパスタくるんと丸め鳥の恋

春燈の句

鈴木直充選

東京 若松 恭子

この話うまくゆくかも桜餅
膝深く折りて信濃の董かな

小気味よく朧夜を裂く裁ち鋏

諦めか妥協か建家陽炎ひぬ

凍ゆるむ葉脈浮ける木の葉石

牛のこ糸風に乗りくる日永かな

行春や堆肥の匂ふ牧草地

倒木の幹の苔むす別れ霜

店までの勾配きつし牡丹鍋

山の宿二人静に雨が降る

水草生ふこの沼にまだ名前なし

夜桜の一本で満ち足りてをり

啓蟄や受講生募集若干名

井の中のくらし蛙の目借時

東京 吉原世都子

リハビリの歩行励まし凍ゆるむ

春一番旅の決意は突として

駘蕩や風神雷神招き猫

千の手の菩薩ゆらめく春の闇

鶯や休み休みの男坂

菜の花やトロッコ列車尻ふつて

金泥の千の仮名文字柳の芽

揚雲雀不意に落つるは何の科

あたたかや老犬乗する乳母車

下総の馬の背に舞ふ花吹雪

スマホにて古歌をひもどく小町の忌

蛇出づる草野球場のネット裏

住人の永き不在や白木蓮

髪ながき少女ばかりや半仙戯

千葉 齊藤 記子

千葉 内田 聰子

千葉 山口 茂

